



1997年の刊行で、モンドラゴンに関する最新の案内書といえる。モンドラゴンはこの10年の間大きな変貌をとげている。90年代の世界経済のグローバル化、大競争時代のなかでモンドラゴンは生き残れないという見方もあったが、モンドラゴンは生き残ったばかりか、さらに大きくなっている。そうした情報はこれまでもいろいろ折に紹介されて来たが、まとまったものとして本書は大変便利であり、参考になる。訳者の労を多としたい。

協同組合の文字通りの株式会社化が世界的に進む中で、モンドラゴンは協同組合複合体から協同組合企業体へと名前を変え、組織機構の改編を進め、新たな事業活動を展開し、生き残ることに成功した。モンドラゴンのこの10年の実験は立派で、とりあえずその点では評者の期待に沿う結果を出している。だが、モンドラゴンの本当の真価が問われるのはこれからである。著者は、モンドラゴン・モデルはスペインのバスク地方だけの例外的な事例ではなく、バレンシアにも北米にもみられるとして、とくに地方のコミュニティの向上と雇用創出のために設立される「コミュニティ・ビジネス」へのその有効性を強調し、カナダの事例をあげている。

モンドラゴン・モデルはそうしたコミュニティ経済のための株式会社に対する1つのオルタナティブたりうることは確かであるが、それだけでコミュニティの問題がすべて解決するわけではない。児童の保育、高齢者や障害者の介護のための社会的企業から、社会的孤立とか孤独死という現代的な貧困の問題を解決するための公共セク

ターとの共同、非営利・協同のネットワーク形成などさまざまな努力が必要になってこよう。

次に著者が重視しているのは、有能なマネージャーの存在とその役割である。その点で労働者による直接管理万能論の誤りを正しく批判している。同時に「モンドラゴン・システムにおいては、政策的管理権は結局のところ労働者の手に帰す」と見ている。重要なことは、両者の間には予定調和的なものはいないし、「管理の矛盾」の解決を具体的にどう進めるかである。「多くの組織者たちができないでいる区別は、企業の政策的管理権と日々進歩する経営管理権との間のそれである。」(206)という指摘の含意は深い。

協同組合は株式会社の限界を照らし出している点で企業改革へのオルタナティブたりうるものであるとともに、現代社会の支配的な企業形態である株式会社の影響を免れることができず、ガバナンス問題など同じ矛盾を抱えているというのが評者の見方である。本書と前後してわが国に紹介されたカズミアの『モンドラゴンの神話』(三輪昌男訳・家の光協会、2000年)は、これまでのモンドラゴン紹介に欠けていた「管理の矛盾」を鋭く抉り出し、労働者協同組合の企業化を批判したもので、本書の著者マクラウドはそれに対してどのように答え、反論するであろうか、意見を聞いてみたいところである。

ともあれ、グローバル化時代の今日、マクラウドの本書は協同組合運動の理論と実践にとって重要な問題を提起していることは間違いなく、貴重な文献といえよう。